

1

解答解説のページへ

正の実数 a, b, p に対して, $A = (a + b)^p$ と $B = 2^{p-1}(a^p + b^p)$ の大小関係を調べよ。

2

解答解説のページへ

斜辺の長さが 1 である正 n 角錐を考える。つまり、底面を正 n 角形 $A_1A_2\cdots A_n$ 、頂点を O と表せば $OA_1 = OA_2 = \cdots = OA_n = 1$ である。そのような正 n 角錐のなかで最大の体積をもつものを C_n とする。

- (1) C_n の体積 V_n を求めよ。
- (2) $\lim_{n \rightarrow \infty} V_n$ を求めよ。

3

[解答解説のページへ](#)

3 辺の長さが $1, 1, a$ である三角形の面積を, 周上の 2 点を結ぶ線分で 2 等分する。それらの線分の長さの最小値を a を用いて表せ。

4

[解答解説のページへ](#)

2以上の自然数 n に対して

$$\int_0^1 t^{2n-1} e^t dt + \left(\sum_{k=1}^{n-1} \frac{{}_{2n-1}P_{2n-2k}}{2k+1} \right) e = (2n-1)!$$

を示せ。ここで e は自然対数の底である。

5

解答解説のページへ

複素平面上の点列 A_n ($n \geq 0$) が複素数列 $a_n + ib_n$ (a_n, b_n は実数, i は虚数単位) を表すとする。極限值 $\lim_{n \rightarrow \infty} a_n = a_\infty$, $\lim_{n \rightarrow \infty} b_n = b_\infty$ がともに存在するとき, 複素数 $a_\infty + ib_\infty$ を表す点 A_∞ を A_n の極限点ということにする。

このとき次の問いに答えよ。

- (1) 複素平面上の点列 P_n ($n \geq 0$) を次のように定める。 P_0 は 0 を表す点とし, P_1 は $1+i$ を表す点とする。以下 $n \geq 2$ に対しては, ベクトル $\overrightarrow{P_{n-2}P_{n-1}}$ を反時計まわりに $\frac{\pi}{3}$ 回転し, 長さを $\frac{2}{3}$ 倍したベクトルが $\overrightarrow{P_{n-1}P_n}$ となるように P_n を定める。 P_n の極限点 P_∞ が表す複素数を求めよ。
- (2) 点列 Q_n ($n \geq 0$) は次のように定める。 Q_0 は 0 を表す点とし, Q_1 は $z = x + iy$ を表す点とする。以下 $n \geq 2$ に対しては, ベクトル $\overrightarrow{Q_{n-2}Q_{n-1}}$ を反時計まわりに $\frac{\pi}{6}$ 回転し, 長さを $\frac{1}{2}$ 倍したベクトルが $\overrightarrow{Q_{n-1}Q_n}$ となるように Q_n を定める。 Q_n の極限点 Q_∞ と(1)の P_∞ が一致するとき z を求めよ。

1

問題のページへ

$A = (a+b)^p$, $B = 2^{p-1}(a^p + b^p)$ に対して, $\frac{b}{a} = x$ とおくと, $x > 0$ として,

$$A = a^p(1+x)^p, \quad B = 2^{p-1}(a^p + a^p x^p) = a^p \cdot 2^{p-1}(1+x^p)$$

すると, $A - B = a^p \{ (1+x)^p - 2^{p-1}(1+x^p) \}$

ここで, $f(x) = (1+x)^p - 2^{p-1}(1+x^p)$ とおくと,

$$f'(x) = p(1+x)^{p-1} - 2^{p-1} \cdot px^{p-1} = p \{ (1+x)^{p-1} - (2x)^{p-1} \}$$

(i) $p-1 > 0$ ($p > 1$) のとき

$$f'(x) > 0 \Leftrightarrow (1+x)^{p-1} > (2x)^{p-1} \Leftrightarrow 1+x > 2x \Leftrightarrow 0 < x < 1$$

$$f'(x) < 0 \Leftrightarrow (1+x)^{p-1} < (2x)^{p-1} \Leftrightarrow 1+x < 2x \Leftrightarrow 1 < x$$

$f(x)$ の値の増減は右図のようになり,

$$f(x) \leq 0$$

よって, $A \leq B$ (等号は $a = b$ のとき成立)

x	0	...	1	...
$f'(x)$		+	0	-
$f(x)$		↗	0	↘

(ii) $p-1 = 0$ ($p = 1$) のとき

$$f(x) = (1+x) - 2^0(1+x) = 0 \text{ より, } A = B$$

(iii) $p-1 < 0$ ($0 < p < 1$) のとき

$$f'(x) > 0 \Leftrightarrow (1+x)^{p-1} > (2x)^{p-1} \Leftrightarrow 1+x < 2x \Leftrightarrow 1 < x$$

$$f'(x) < 0 \Leftrightarrow (1+x)^{p-1} < (2x)^{p-1} \Leftrightarrow 1+x > 2x \Leftrightarrow 0 < x < 1$$

$f(x)$ の値の増減は右図のようになり,

$$f(x) \geq 0$$

よって, $A \geq B$ (等号は $a = b$ のとき成立)

x	0	...	1	...
$f'(x)$		-	0	+
$f(x)$		↘	0	↗

(i)(ii)(iii)をまとめて,

$p > 1$ かつ $a \neq b$ のとき $A < B$, また $0 < p < 1$ かつ $a \neq b$ のとき $A > B$, さらにこれらの場合以外の $p = 1$ または $a = b$ のとき $A = B$

[解説]

A も B も a と b についての p 次式で, しかも定数項が 0 なので, a と b の比を考えて文字を減らしました。この常套手段で結論が導けます。

2

問題のページへ

(1) 底面の正 n 角形の面積を S , 外接円の半径を r とし, 正 n 角錐の高さを h とすると, 条件より,

$$r^2 + h^2 = 1 \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$S = \left(\frac{1}{2} r^2 \sin \frac{2\pi}{n} \right) \times n = \frac{nr^2}{2} \sin \frac{2\pi}{n} \cdots \cdots \textcircled{2}$$

よって, 正 n 角錐の体積を V とすると, ①②より,

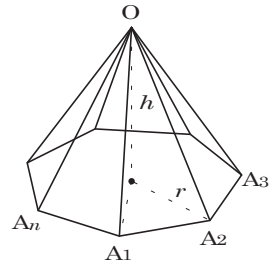
$$V = \frac{1}{3} Sh = \frac{1}{6} nr^2 h \sin \frac{2\pi}{n} = \frac{1}{6} n (1 - h^2) h \sin \frac{2\pi}{n}$$

$f(h) = (1 - h^2)h$ とおくと, ①より,

$$0 < h < 1 \text{ で, } f'(h) = 1 - 3h^2$$

右表より, $h = \frac{1}{\sqrt{3}}$ のとき, $f(h)$ は最大値

$$f\left(\frac{1}{\sqrt{3}}\right) = \frac{1}{\sqrt{3}} \cdot \frac{2}{3} = \frac{2}{9} \sqrt{3} \text{ をとる。}$$



h	0	...	$\frac{1}{\sqrt{3}}$...	1
$f'(h)$		+	0	-	
$f(h)$		↗		↘	

よって, V の最大値 V_n は, $V_n = \frac{1}{6} n \frac{2}{9} \sqrt{3} \sin \frac{2\pi}{n} = \frac{\sqrt{3}}{27} n \sin \frac{2\pi}{n}$

$$(2) (1) \text{ より, } \lim_{n \rightarrow \infty} V_n = \frac{\sqrt{3}}{27} \lim_{n \rightarrow \infty} n \sin \frac{2\pi}{n} = \frac{\sqrt{3}}{27} \lim_{n \rightarrow \infty} 2\pi \cdot \frac{\sin \frac{2\pi}{n}}{\frac{2\pi}{n}} = \frac{2\sqrt{3}}{27} \pi$$

[解説]

本問のような問題が出されたのは, あっさり解ける問題も必要ということでしょうか。そのためか, 今年は出題数が1つ増加しました。

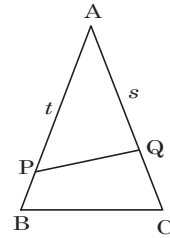
3

問題のページへ

$AB = AC = 1, BC = a$ とすると、三角形の形成条件より $0 < a < 2$ となる。

(i) 線分の両端がともに等辺上にあるとき

右図のように 2 点 P, Q を設定し、 $AP = t, AQ = s$
 ($0 < t \leq 1, 0 < s \leq 1$) として、 $\triangle ABC = 2 \triangle APQ$ のとき
 を考える。



$$\frac{1}{2} \cdot 1 \cdot 1 \cdot \sin A = 2 \cdot \frac{1}{2} ts \sin A, \quad 2ts = 1 \dots\dots\dots \textcircled{1}$$

$$\text{余弦定理より, } \cos A = \frac{1+1-a^2}{2 \cdot 1 \cdot 1} = 1 - \frac{a^2}{2} \dots\dots\dots \textcircled{2}$$

$$\textcircled{1}\textcircled{2}\text{より, } PQ^2 = t^2 + s^2 - 2ts \cos A = t^2 + \frac{1}{4t^2} - 1 + \frac{a^2}{2} \dots\dots\dots \textcircled{3}$$

ここで、相加平均と相乗平均の関係より、 $t^2 + \frac{1}{4t^2} \geq 2\sqrt{t^2 \cdot \frac{1}{4t^2}} = 1$

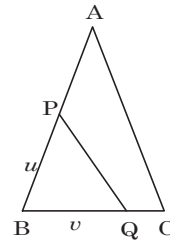
等号は $t^2 = \frac{1}{4t^2}$ のとき成立し、 $0 < t \leq 1$ を満たすのは $t = \frac{1}{\sqrt{2}}$ のときとなる。この

とき $\textcircled{1}$ より、 $s = \frac{1}{\sqrt{2}}$ となり、 $0 < s \leq 1$ を満たす。

以上より、 PQ^2 の最小値 m_1 は $\textcircled{3}$ より、 $m_1 = 1 - 1 + \frac{a^2}{2} = \frac{a^2}{2}$

(ii) 線分の両端が一方は等辺上で他方は底辺上にあるとき

右図のように 2 点 P, Q を設定し、 $BP = u, BQ = v$
 ($0 < u \leq 1, 0 < v \leq a$) として、 $\triangle BAC = 2 \triangle BPQ$ のとき
 だけを考えても一般性は失われない。



$$\frac{1}{2} \cdot 1 \cdot a \cdot \sin B = 2 \cdot \frac{1}{2} uv \sin B, \quad 2uv = a \dots\dots\dots \textcircled{4}$$

$$\text{このとき, } \cos B = \frac{BC}{2AB} = \frac{a}{2} \dots\dots\dots \textcircled{5}$$

$$\textcircled{4}\textcircled{5}\text{より, } PQ^2 = u^2 + v^2 - 2uv \cos B = u^2 + \frac{a^2}{4u^2} - \frac{a^2}{2} \dots\dots\dots \textcircled{6}$$

ここで、 $0 < v \leq a$ なので $\textcircled{4}$ から $0 < \frac{a}{2u} \leq a$ 、すなわち $\frac{1}{2} \leq u$ となり、 $0 < u \leq 1$ と
 合わせて $\frac{1}{2} \leq u \leq 1$ となる。

さて、 $u^2 = x$ とおき、 $f(x) = x + \frac{a^2}{4x}$ を考える。

$$f'(x) = 1 - \frac{a^2}{4x^2} = \frac{(2x-a)(2x+a)}{4x^2}$$

$\frac{1}{2} \leq u \leq 1$ より、 $\frac{1}{4} \leq x \leq 1$

また、 $0 < a < 2$ から、 $0 < \frac{a}{2} < 1$

x	0	...	$\frac{a}{2}$...
$f'(x)$		-	0	+
$f(x)$		↘	a	↗

(ii-i) $\frac{1}{4} \leq \frac{a}{2}$ ($\frac{1}{2} \leq a < 2$) のとき

$f(x)$ の最小値は $f\left(\frac{a}{2}\right) = a$

このとき PQ^2 は最小値 m_2 をとり, ⑥より

$$m_2 = a - \frac{a^2}{2} = -\frac{1}{2}(a-1)^2 + \frac{1}{2}$$

(ii-ii) $\frac{a}{2} < \frac{1}{4}$ ($0 < a < \frac{1}{2}$) のとき

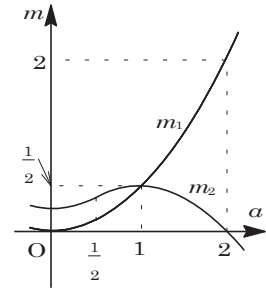
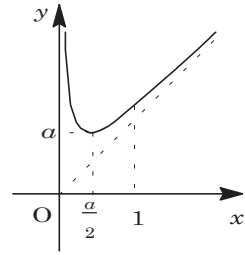
$f(x)$ の最小値は $f\left(\frac{1}{4}\right) = \frac{1}{4} + a^2$

このとき PQ^2 は最小値 m_2 をとり, ⑥より

$$m_2 = \frac{1}{4} + a^2 - \frac{a^2}{2} = \frac{a^2}{2} + \frac{1}{4}$$

(i)(ii)をまとめて, a と PQ^2 の最小値 m との関係を図にすると, 右図のようになる。

これより, $0 < a < 1$ のとき $m = m_1 = \frac{a^2}{2}$, $1 \leq a < 2$ のとき $m = m_2 = a - \frac{a^2}{2}$



よって, PQ の最小値は, $0 < a < 1$ のとき $\sqrt{\frac{a^2}{2}} = \frac{a}{\sqrt{2}}$, $1 \leq a < 2$ のとき $\sqrt{a - \frac{a^2}{2}}$

[解説]

(ii)の場合も(i)の場合と同じく, まず相加平均と相乗平均の関係を用いて最小値 m_2 を求めようとした。ところが, 等号成立条件が「あやしい」と感じましたので, 関数を対応させて丁寧に解いてみました。最終的には, 杞憂に過ぎなかったものの, 解は長くなってしまいました。

4

問題のページへ

$I_n = \int_0^1 t^n e^t dt$ とおくと、部分積分により、

$$I_n = \left[t^n e^t \right]_0^1 - n \int_0^1 t^{n-1} e^t dt = e - nI_{n-1} \cdots \cdots \textcircled{1}$$

$$\begin{aligned} \text{また, } \sum_{k=1}^{n-1} \frac{{}^{2n-1}P_{2n-2k}}{2k+1} &= \sum_{k=1}^{n-1} \frac{(2n-1)!}{(2k+1)(2k-1)!} = (2n-1)! \sum_{k=1}^{n-1} \frac{2k}{(2k+1)!} \\ &= (2n-1)! \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{1}{(2k)!} - \frac{1}{(2k+1)!} \right) \cdots \cdots \textcircled{2} \end{aligned}$$

証明すべき式 $\int_0^1 t^{2n-1} e^t dt + \left(\sum_{k=1}^{n-1} \frac{{}^{2n-1}P_{2n-2k}}{2k+1} \right) e = (2n-1)! \cdots \cdots (*)$ は、②より、

$$(*) \Leftrightarrow \frac{I_{2n-1}}{(2n-1)!} + e \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{1}{(2k)!} - \frac{1}{(2k+1)!} \right) = 1 \cdots \cdots \textcircled{3}$$

さらに、 $\frac{I_{2n-1}}{(2n-1)!} = J_n$ とおくと、

$$\textcircled{3} \Leftrightarrow J_n = 1 + e \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{1}{(2k+1)!} - \frac{1}{(2k)!} \right) \cdots \cdots \textcircled{4}$$

ここで、①から、

$$\begin{aligned} J_{n+1} &= \frac{I_{2n+1}}{(2n+1)!} = \frac{e - (2n+1)I_{2n}}{(2n+1)!} = \frac{e}{(2n+1)!} - \frac{I_{2n}}{(2n)!} \\ &= \frac{e}{(2n+1)!} - \frac{e - 2nI_{2n-1}}{(2n)!} = \frac{e}{(2n+1)!} - \frac{e}{(2n)!} + \frac{I_{2n-1}}{(2n-1)!} \\ &= J_n + e \left(\frac{1}{(2n+1)!} - \frac{1}{(2n)!} \right) \end{aligned}$$

$$n \geq 2 \text{ で, } J_n = J_1 + e \sum_{k=1}^{n-1} \left(\frac{1}{(2k+1)!} - \frac{1}{(2k)!} \right)$$

$$\text{ここで, } J_1 = I_1 = \int_0^1 te^t dt = \left[te^t \right]_0^1 - \int_0^1 e^t dt = e - (e-1) = 1$$

よって、 $n \geq 2$ で④は成立するので、(*)は成立する。

[解説]

最初は③式を数学的帰納法で証明しました。しかし②式を眺めていると、直接的な証明が可能ではないかと思えてきました。それで考え直して書いたのが上の解です。

5

問題のページへ

(1) $P_n(w_n)$ とすると, $w_0 = 0$, $w_1 = 1 + i$ となる。また $P_\infty(w_\infty)$ とおく。

ここで, $\alpha = \frac{2}{3} \left(\cos \frac{1}{3} \pi + i \sin \frac{1}{3} \pi \right) = \frac{2}{3} \cdot \frac{1 + \sqrt{3}i}{2} = \frac{1 + \sqrt{3}i}{3}$ とすると, 条件より,

$$w_n - w_{n-1} = \alpha(w_{n-1} - w_{n-2})$$

$$w_{n+1} - w_n = (w_1 - w_0) \alpha^n = (1 + i) \alpha^n$$

$$n \geq 1 \text{ で, } w_n = w_0 + \sum_{k=0}^{n-1} (1 + i) \alpha^k = (1 + i) \frac{1 - \alpha^n}{1 - \alpha}$$

$|\alpha| = \frac{2}{3} < 1$ より, $n \rightarrow \infty$ のとき $\alpha^n \rightarrow 0$, $w_n \rightarrow w_\infty$ なので,

$$w_\infty = \frac{1 + i}{1 - \alpha} = \frac{1 + i}{1 - \frac{1 + \sqrt{3}i}{3}} = \frac{3(1 + i)}{2 - \sqrt{3}i} = \frac{3(2 - \sqrt{3}) + 3(2 + \sqrt{3})i}{7}$$

(2) $Q_n(z_n)$ とすると, $z_0 = 0$, $z_1 = z$ となる。また $Q_\infty(z_\infty)$ とおく。

ここで, $\beta = \frac{1}{2} \left(\cos \frac{1}{6} \pi + i \sin \frac{1}{6} \pi \right) = \frac{1}{2} \cdot \frac{\sqrt{3} + i}{2} = \frac{\sqrt{3} + i}{4}$ とすると, 条件より,

$$z_n - z_{n-1} = \beta(z_{n-1} - z_{n-2})$$

$$z_{n+1} - z_n = (z_1 - z_0) \beta^n = z \beta^n$$

$$n \geq 1 \text{ で, } z_n = z_0 + \sum_{k=0}^{n-1} z \beta^k = z \frac{1 - \beta^n}{1 - \beta}$$

$|\beta| = \frac{1}{2} < 1$ より, $n \rightarrow \infty$ のとき $\beta^n \rightarrow 0$, $z_n \rightarrow z_\infty$ なので,

$$z_\infty = \frac{z}{1 - \beta} = \frac{z}{1 - \frac{\sqrt{3} + i}{4}} = \frac{4z}{(4 - \sqrt{3}) - i}$$

条件より, $z_\infty = w_\infty$ なので, $\frac{4z}{(4 - \sqrt{3}) - i} = \frac{3(2 - \sqrt{3}) + 3(2 + \sqrt{3})i}{7}$

$$\begin{aligned} \text{よって, } z &= \frac{3}{28} \left\{ (2 - \sqrt{3}) + (2 + \sqrt{3})i \right\} \left\{ (4 - \sqrt{3}) - i \right\} \\ &= \frac{3(13 - 5\sqrt{3}) + 9(1 + \sqrt{3})i}{28} \end{aligned}$$

[解説]

複素数列の極限に関する有名頻出問題です。昨年も上智大・理工で類題が出ています。